4/21/2006

＊キリスト教学演習＊＊＊＊＊＊＊＊＊ S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション

Ａ．テーマ：宗教と科学の関係論構築に向けて――プロセス神学（１）――

Ｂ．演習の目的

「宗教と科学」の関係を現代世界の新しい問題連関において解明することは、現代キリスト教思想研究の中心的テーマの一つに他ならない。本年度は、こうしたキリスト教思想研究の動向を代表するプロセス神学について考察を深めてみたい。

まず、プロセス神学の基本的な議論を確認するために、カブの『ポストモダニズムと公共政策』を取り上げる。とくに、前半の内容を中心にプロセス神学への導入を行いたい。その後に、グリフィンの『宗教と科学的自然主義』によって、プロセス神学の立場から「宗教と科学」関係論へと考察を進めてゆきたい。

プロセス神学は、ホワイトヘッドのプロセス哲学に依拠したキリスト教思想と考えることができるが、その理解には、ホワイトヘッドなどの関連思想を学ぶことが必要になる。この演習では、参加メンバーの実情に応じて、必要な文献を補足的に扱う予定である。また、参加メンバー自身の問題意識に基づく研究発表の機会も設けたい。

Ｃ．テキストについて

John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy*, State University of New York Press 2002

David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism*, Sate University of New York Press 2000

＜ホワイトヘッドの形而上学と神＞

本章では、ホワイトヘッドが神論を展開する枠組みである形而上学的宇宙論について、必要な範囲で概観を行い、その上で神論へと考察を進めることにしよう。(2)

まず、ホワイトヘッドの形而上学の意図についてであるが、それは、無機物と有機体を包括する実在全体を統一的に理解する世界像を、現代科学の実在理解の基礎の上に構築することである。そのために、現代科学の実在理解の一般化という方法が採用される。

「現実的存在(actual entity)を構成するもっとも単純な諸要素についてのこの形而上学的な記述は、現代物理学の諸概念の枠組みとなる一般的な諸原理に端的に一致するということがわかる。……しかし、物理学の一般的な諸原理はまさに、我々が有機体の哲学によって要求される形而上学の特殊な例示として期待すべきものなのである。……科学は特定の種を探求し、形而上学はそれらの種がそこに収まる一般的な諸概念を探求しなければならない。」(Whitehead[1929], p.137)

しかし、この現代科学の実在理解の一般化という方法論は、決してホワイトヘッドの独

創ではない。むしろ、ホワイトヘッドはこの哲学の方法論が古代ギリシャのアリストテレスの形而上学の方法であったことを指摘している。

「アリストテレスは第一動者という神を導入することによって自らの形而上学を完成させる必要性を見出した」、「第一動者という言い回しが我々に警告しているのは、細部において、アリストテレスが誤った自然学と誤った宇宙論に陥っているということである。」（Whitehead［1925］, pp.173-174）

つまり、自然学や宇宙論から形而上学へという思想展開は、形而上学を構築する際の方法論として広く採用されてきたものなのであるが、問題は適切な自然学と宇宙論に依拠するということであって、ホワイトヘッドは、その点で、二〇世紀に大きな転換を見せた現代物理学（相対論と量子力学）の実在理解を出発点とするのである。(3)

では、その出発点に置かれた現代科学の実在理解とは具体的にどのようなものであろうか。そのポイントは、一切の実在は相互作用連関の内にあり（相対性の原理 <the principle of relativity>、宇宙の連帯性 <the solidarity of the universe>）、実在の基本的なあり方は固定的で離散的な粒子ではなく、動的な過程として理解すべきであるということである。

次に、以上の方法によって提示された実在理解の内容へと考察を進めてみよう。諸実在を構成する基本単位としての現実的存在 ── 原子論における原子に相当する ── は、自然的極と精神的極からなる両極構造によって理解される。

現実的実在が自然的極を有するということは、すべての実在はほかの諸実在との相互的な作用連関の内にあって、こうしたほかの諸実在からなる環境の限定を受けていることを意味する。それに対して、精神的極においては、環境からの作用を取捨選択することによって、一定の価値判断や目的に従った自己形成が行われる。この自然的極と精神的極の両極的な統合（＝合生<concrescence>）という実在理解において、ホワイトヘッドが作用因の支配する近代的な機械論的世界観と、目的因を認める目的論的世界観との統合を目指していることが明らかになる。「健全な形而上学の一つの課題は、目的因と作用因とをそれら相互の適切な関係において明らかにすることなのである」（Whitehead［1929］, p.101）。なお、精神的極における自己形成とは、人間などの意識的存在者に限定されるのではなく、あらゆる形態とレベルにおける諸実在すべてに認められる点を強調しておきたい。(4)

こうした両極構造を有する現実的存在は、静的な実在というよりも、一つのプロセスとして理解されねばならない。

「現実的存在は次のような三重の性格を有している。１．それは過去により付与された性格をもつ、２．それは合生の過程において目指される主観的性格をもつ、３．それは、自己超越的な性格（the superjective character）、つまり、超越的な創造性を限定する特殊な満足というプラグマティックな価値をもっている。」（ibid., p.105）

この三重の性格とは、現実的存在が、その自然的極において因果的に包握（prehension）された過去的世界（環境）によって限定されつつも、精神的極において、一定の主体的目的の未来における実現を目指し（自己創造）、こうしてそのつどの現在において実現され

た自らの存在を後続するすべての諸現実的存在（自身とほかの現実的存在を含む実在の全体）に対して、客体的存在として与える（＝自らを超え出て自らを他者に与える、因果的に客体化される存在となる)、という一連のプロセスとして存在していることを意味している。ホワイトヘッドの形而上学がプロセス哲学と言われるのは、現実的存在はプロセスであるというこの基本命題に基づいてのことなのである。プロセスを構成する１と３は、ほかの諸実在との相互連関・連帯を、２は個別性における自由・自己創造を意味しているが、全体としてはみれば、自己創造を通した世界創造への参与とまとめられるであろう。創造とは、新しい価値（真、善、美）の実現であり、そのためには価値という概念的存在（永遠的客体 <eternal object>）を包握することと自らの主体的目的へと向かう自由が要求されるのである。(5) その機能を担っているのが現実的存在の精神的極であり、またこうした宇宙の存在目的に向けて世界創造の全体を動かしている存在論的原理が、創造性(creativity)に他ならない。

ホワイトヘッドは、以上の形而上学的枠組みの中にそれを完成させるものとして、「神」を導入する。その点でホワイトヘッドの形而上学的宇宙論は、有神論的と言うことができるが、問題は、この場合の「神」という現実的存在に対してもこれまでの議論がそのまま妥当するという点である。「神はすべての形而上学的原理に対する例外として取り扱うべきではない」、「神はその主要な典型的実例なのである」(ibid., p.405)。したがって、ホワイトヘッドの神論は、神をすべての現実的存在と同様のものとして、超自然的な存在ではなく自然的な存在として扱っており、その意味で、自然主義の立場（有神論的自然主義あるいは自然主義的有神論）をとっていると言える。以下、これまでの議論と対応させながら、ホワイトヘッドの神論の内容をまとめてみよう。

神も一つの現実的存在であるということから、神についても三重の性格・本性が区別されることになる。それらは、原初的本性(the primordial nature)、結果的本性(the consequent nature)、自己超越的本性(the superjective nature)と言われるが ── 現実的存在としての一つの全体的な神的プロセスにおいて相互に区別された三つの本性 ── 、この三つの本性を有することによって、神は世界に依存しつつも世界から独立であり、世界に働きかける存在者であることが帰結する。

『過程と実在』でホワイトヘッドが行う議論から、三つの本性の特徴をまとめれば、次のようになる。(6)

①原初的本性（「神から世界へ」の働きかけ・誘因、ibid., pp.83, 405-406）

１．永遠的諸客体の相互の関連性における神の役割（永遠的客体の概念的な抱握)。

神による永遠的諸客体の非時間的評価が、時間的世界の経過に先立って非派生的になされ、それによって永遠的諸客体に統一性が与えられる。ただし、この段階における永遠的客体は可能性にとどまっており、現実性の十全さを備えていない。

２．永遠的諸客体とそれを現実化する現実的存在との関係性における神の役割。

永遠的客体（形相）と外延的連続体（質料）とから、時空的連続体（現実的存在の社会）を形成する、つまり現実の世界を構築する。

３．各現実的存在に対する神の役割。

各現実的存在にその最初の主体的目的を供給し、説得的誘因(persuasive lure)として世界創造のプロセスを導いてゆく。神の原初的本性から直接導き出される主体的目

的、理想的な完全性の実現への衝動が、現実的存在の合生過程を導いてゆく。

②結果的本性（「世界から神へ」、ibid., pp.406-409）

展開する宇宙の諸現実的存在を神が自然的抱握することであり、この点から言えば、神の本性は世界の創造的前進の結果として存在すると言える（世界が神を作る）。しかし、通常の現実的存在の場合と同様に、神による世界の自然的抱握は選択的であり、或るものは消極的抱握を通して神から排除される（＝神の審判）。「神の結果的本性は、流動的な世界が神におけるその客体的不死性によって＜不朽なものとなる＞ことである」(ibid., p.409)。

③自己超越的本性（「神から世界へ」の働きかけ・世界への内在）

神が自らを後続する現実的存在に与件として与えることであり、この点から、神は世界に内在すると言える。しかし、『過程と実在』においては、原初的本性や結果的本性と比べて、自己超越的本性についてはほとんど内容的な展開が見られない。

以上、ホワイトヘッドの形而上学における神論を、神の三つの本性に関して概観してきたが、とくに注目すべきは、次の点である。

ホワイトヘッドの形而上学の意図と方法論の帰結とも言えることであるが、形而上学の内に場を与えられたホワイトヘッドの神は、本質的に世界との関係性における神であり、世界と切り離されても存在するような超自然的な神ではない。しかし、その世界との関わりには、いわば神と世界の逆対応とでも言うべき関係が見られる。「神と世界は対照的な反対者(the contrasted opposites)である」(ibid., p.410)。つまり、神も世界内の他の現実的存在も、それぞれの一つのプロセスとして存在しているが、そのプロセスはちょうど逆に進行する。神に関しては原初的本性からプロセスが開始され（原初的本性におけて神は不変である。世界創造のプロセスの誘因として働き続ける)、そして結果的本性（結果的本性において、神は可変的である）による世界の選択的受容が続くのに対して、他の現実的存在の場合、過去的世界による限定からプロセスが開始され、次に精神的極における主体的目的に向けた自己形成が続く。このように神的プロセスにおいては、能動性から受動性への展開がなされるのに対して、他の現実的存在のプロセスにおいては、逆に受動性から能動性への展開となる。

こうした神と世界の自然的な関係は、万有在神論と表現できるかもしれない。[7] なぜなら、ホワイトヘッドの神は、その原初的本性に従えば永遠的恒常的である、と同時に結果的本性に従えば時間的流転的であるが（ibid., p.410)、このことは、神が世界超越的であると同時に世界内在的、あるいは世界に含まれる共に世界を含むと解することができるからである。ホワイトヘッドは、この神を世界に対する、「偉大なる同伴者、理解ある苦しみを共にする仲間」(ibid., p.413)と表現している。

これまでの考察から、ホワイトヘッドの形而上学が、科学と宗教（有神論）とを、自然主義的有神論（万有在神論）という仕方で統合する宇宙論を提示している点については、一定程度明らかになったものと思われる。もちろん、このホワイトヘッドの自然主義的有神論が、宗教と科学の対立を克服するものとして、説得力を有するかについては、批判的な検討が必要になる。批判的検討は、科学の側からと宗教の側からの双方から行われねばならないが、本章を閉じるに当たって、ホワイトヘッドの自然主義について、問題点を述べておきたい。

自然主義に関しては、強いあるいは狭義の自然主義（機械論と唯物論を基礎とし、決定論や還元主義という特徴を有し、無神論を帰結する世界観）と弱いあるいは広義の自然主義とを区別することが可能であり、[8] ホワイトヘッドの自然主義は、後者の自然主義と言える。したがって、ホワイトヘッドによる宗教と科学の対立を克服する試みを評価する際のポイントの一つは、有神論に場を与えるだけ広く解されたその自然主義の妥当性にある。言い換えれば、どうしてホワイトヘッドは、無神論ではなく有神論をとるのかという問題である。もちろん、これには、近代以降、広範に浸透してきた強い自然主義が、その哲学的な基礎に関しても、あるいはその科学性に関しても、説得性をかなり減退させてきているというポストモダンの知的状況が密接に関係している。しかし、ホワイトヘッドに即して考えるとき､彼が有神論と調和するように自然主義を改訂した動機を理解するには、先にまとめたホワイトヘッドの神論を振り返ることが有益である。

先に、ホワイトヘッドの神論、とくに神の原初的本性で論じられたことの中で注目したいのは、神に対して、それ自体としては可能性にとどまっている永遠的客体を現実世界において現実化し、また新しい価値の実現に向けて世界過程を導くという役割が与えられているという点である。この点から見れば、神は世界における価値（概念的あるいは精神的な存在）の実現のために要請されていると解することができる。「社会の文明は真理、美、冒険、そして芸術という徳を要求」（Whitehead[1933], p.283）しており、こうした価値的なものなしに真の人間性は存在できない。そしてこれらの価値的なものは物質に還元できず、価値的なものの実現の根拠は、その実現に向けて努力する精神的な存在者（精神的極）を必要とする。このような確信がホワイトヘッドを自然主義の有神論的な改訂に向かわせたのである。したがって、ホワイトヘッドの形而上学的世界観の妥当性は、自然主義を広義に改訂することの妥当性の問題であり、価値的なものとその実現をどのように理解するのかにかかっているのである。もし、宗教と科学との対立が真に克服できるとするならば、自然主義の改訂はまさにそのポイントとなるであろう。

＜文献＞

本書において、略記号で引用される文献は以下の通りである。なお、ホワイトヘッド、ハーツホーン、パネンベルクの文献については、下記に示す邦訳が存在するが、用語の統一などの理由から、本論文では私訳により引用を行った。

Whitehead[1925]：Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World*, 1925(1967) A Free Press Paperback.（上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社 一九八一年。）

Whitehead[1929]：*Process and Reality. An Essay in cosmology*, 1929（1969） A Free Press Paperback.（山本誠作訳『過程と実在』松籟社　一九七九年。）

Whitehead[1933]：*Adventures of Ideas*, 1933(1967) A Free Press Paperback. （山本誠作・菱木政晴訳『観念の冒険』松籟社　一九八二年。）

Cobb[2002]：John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, Politics, and the Economy*, State University of New York Press　2002.

Griffin[2000]：David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism. Overcoming the Conflicts*, Sate University of New York Press　2000,　pp.26-28.

Harthshorne[1967]：Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967.
（大塚稔訳『自然神学の可能性』行路社　二〇〇二年。）
Pannenberg[1988]：Wolfhart Pannenberg, Anfang Atom, Dauer, Gestalt: Schwierigkeiten mit der Prozesphilosophie, in: *Metaphysik und Gottesgedanke*, Vandenhoeck 1988 S.80-91.（座小田豊・諸岡道比古訳『形而上学と神の思想』法政大学出版局 一九九〇年。）

＜注＞

(1) 「宗教と科学」をめぐる問題状況については、次の文献を参照。
Alister E. MacGrath, Science & Religion. An Introduction, Blackwell 1999.
（稲垣和久・倉沢政則・小林高徳訳『科学と宗教』教文館　二〇〇三年。）

(2) 『過程と実在』を中心としたホワイトヘッドの形而上学については、次の研究文献を参照した。
山本誠作　『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社　一九七七年。
Donald W. Sherburne (ed.), *A Key to Whitehead's Process and Reality*, The University of Chicago Press 1966 (1981).

(3) ホワイトヘッドの形而上学と現代物理学との関わりについては、次の文献を参照。
田中裕　『ホワイトヘッド　有機体の哲学』講談社　一九九八年。
Michael Epperson, *Quantum Mechanics and the Philosoophy of Alfred North Whitehead*, Fordham University Press 2004.

(4) ホワイトヘッドが、両極構造をすべての現実的存在、つまり無機物にも認めていることは、宗教と科学との対立の一因であった二つの感覚主義的なドグマ（強い自然主義）――「感覚与件を通してのみ、実在は認識される」「科学のみが何が実在的であるかについて指示を与える」――の拒否を意味している。実際、ホワイトヘッドの抱握(prehension)は、感覚的知覚だけでなく、より直接的で多様な非感覚的な知覚（それを通して我々が自らを有機的な統一体である気づくことになる身体感覚、持続的経過の感覚、目的や直接的な未来に対する志向性の感覚）を含んでいる。

(5) 永遠的客体（eternal object）については、注２の山本[1977], 101-109 頁、あるいは注３の田中[1998], 272-273 頁、において簡潔な説明がなされている。

(6) もちろん、ここで扱われるのは、ホワイトヘッドの神論の全体ではない。たとえば、世界の創造的前進の根底にある外延的連続体(the extensive continuum）の原子化・選択的制限と神の決断との関わり(Whitehead[1929], p.83)などの議論は省略された。また本論文では、ホワイトヘッドの錯綜した議論がかなり単純化されている点をお断りしておきたい。

(7) 万有在神論については、ハーツホーンが明確な議論を行っているが、ティリッヒとの比較という観点からの研究文献として、次のものが挙げられる。
David H. Nikkel, *Panentheism in Hartshorne and Tillich. A Creative Synthesis*, Peter Lang 1995.

(8) 自然神学の改訂という問題については、次の拙論も参照。
芦名定道　「キリスト教と進化論」、金城学院大学キリスト教文化研究所　『宗教と

科学』（仮題）、掲載予定

(9) Charles Hartshorne, *Anselm's Discovery. A Re-examination of the Ontological Argument for God's Existence,* Open Court Publishing　1965.

(10) ホワイトヘッドにおける共同体論あるいは社会理論に関しては、次の文献を参照。
プロセス研究シンポジウム　『ホワイトヘッドと文明論』行路社　一九九五年。

(11) ヒックの宗教多元主義に対する批判的論評としては、次の文献を参照。
間瀬啓允・稲垣和久編『宗教多元主義の探究－ジュン・ヒック考－』大明堂
一九九五年。
なお、カブに関しては、次の文献も参照。
宮平望　『現代アメリカ神学思想　平和・人権・環境の理念』新教出版社
二〇〇四年、一九一-二四八頁。

(12) ここでカブが言及しているのは、リンドベックの次の文献であるが、ポストリベラリズムへの同様の批判としては、栗林の議論も参照。
George Lindbeck, *The Nature of Doctrine*, Westminster Press　1984.
栗林輝夫　『現代神学の最前線』新教出版社　二〇〇四年、一八五-一九九頁。

(13) Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress　1993.

＜過去の特殊講義から＞

①２００２年度

オリエンテーション（導入）－宗教と科学という問題・問題群１－　（ 4/16）

第一部：自然の宗教哲学の構築を目指して

第一章：自然の宗教哲学の構想とティリッヒの次元論

１－１：宗教的問いとしての健康と病　（4/23）

１－２：新約聖書と治癒者イエス　（5/7,5/14）

１－３：ドイツ観念論と生の動態（5/21, 5/28）

１－４：ティリッヒの生の現象学

１．生の多次元的統一性（6/4）

２．神学体系における生（6/25）

３．まとめ（7/2）

EXKURS １：「多元社会を生きるキリスト教－民族、平和－」（6/11）

EXKURS ２：アジアの宗教的多元性とキリスト教思想の再構築　（10/1）

第二章：宗教言語と科学言語

２－１：問題状況（10/8）

２－２：隠喩論から見た科学と宗教

１．現代言語論における隠喩（10/15）

２．科学言語と隠喩（10/22）

３．宗教言語と隠喩（10/29）

２－３：レトリックから見た科学と宗教

１．レトリック論再考（11/5）

２．科学的知とレトリック（11/12）
３．宗教的知とレトリック（11/19）
２－４：まとめ－現代キリスト教思想の動向から－（11/26）

②２００３年度（http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub5h.htm）
オリエンテーション－「宗教と科学」問題群２－ 4/14
第三章：形而上学再考
３－１：問題 4/21
３－２：形而上学とキリスト教思想－ハイデッガー、パネンベルク－ 4/28
３－３：「宗教と科学」問題群と形而上学－ギルキー－ 5/19
３－４：形而上学の可能性－ホワイトヘッドとプロセス神学－ 5/26, 6/9, 16, 23, 7/7
第四章：精神と宗教
４－１：精神とは－ドイツ観念論とキリスト教思想－
４－２：生の次元論と精神－新しい次元の創発性の理論化に向けて
４－３：社会システム論とパラドックス－ルーマン－
EXKURS １：「宗教的多元性－対話－平和－グローバル化」 5/12
・「宗教間対話と平和思想の構築－現状と課題－」
・「キリスト教思想の再構築とアジアの宗教的多元性」
第１節．問題状況
第２節．近代世界とキリスト教の変動
第３節．エキュメニズムから宗教間対話へ
第４節．アジア・キリスト教の可能性
第５節．対話は何を目指すのか
・「多元性・グローバル化」「民族主義と平和」
EXKURS ２：「宗教と科学－宗教学の科学性、生命、環境－」
・「科学としての宗教学」 6/2
・「宗教改革と科学」
・「生命倫理の新しい動向」 (10/6)
・「終末論とエコロジー・エコノミー」

③２００４年度
オリエンテーション－なぜ、「宗教と科学」なのか－ 4/20 4/27
インターリュード－問題の中間的なまとめとして－
１．エコロジーの神学の諸問題 5/11 5/18
１－１：リン・ホワイトの問題提起と論争
１－２：創造物語の「支配」をめぐって
１－３：破壊はどこから
１－４：創造から終末へ
１－５：キリスト教における共生思想の系譜
１－６：時間に対する空間の復権（近代批判）

２．ティリッヒ　生の次元論　　5/25　6/1
２－１：なぜ次元論か
２－２：ティリッヒの次元論
２－３：次元論の適用例
２－４：次元論の展開・具体化のために
３．宗教言語と科学言語　6/8　6/15　6/22
３－１：隠喩とモデル
３－２：レトリックから見た宗教と科学
３－３：言語・想像力・倫理
４．形而上学の意義　　6/29　7/6　7/13
４－１：形而上学とは何か
４－２：形而上学の再考に向けて
４－３：新しいキリスト教思想の動向から
第四章：精神と宗教
４－１：精神とはードイツ観念論とキリスト教思想－　　10/5
４－２：生の次元論と精神－新しい次元の創発性の理論化に向けて　　10/19
４－３：社会システム論とパラドックスールーマン－　　11/2, 11/9, 11/16
４－４：カオスと自己組織化　　11/30, 12/7
４－５：まとめ　　12/14
EXKURS: 組織神学の可能性－＜宗教と科学＞関係論の観点から－　　10/26

④２００５年度
はじめに－「宗教と科学」関係論構築を目指して－　　4/22
導入　なぜ・いかにして関係を問うのか－モルトマンの場合－　　5/6
１．自然神学とその再構築
自然神学の成立とその意義　　5/13
中世から宗教改革
科学革命と自然神学　　5/20
近代イギリスと自然神学の伝統
進化論論争と自然神学　　5/27, 6/3
自然神学の再構築　　6/10
２．「宗教と科学」関係論の基礎
形而上学再考　　6/17
ホワイトヘッドの宗教論　　6/24
プロセス神学の挑戦　　7/1
プロセス神学と「宗教と科学」関係論　　7/8
前期のまとめ、後期への導入　　10/7
３．現代の環境論とキリスト教思想
創造論と環境－いわゆる人間中心主義について－　　10/14
自然神学の生命論と環境破壊－近代の諸相－　　10/21

環境破壊の原因を問う－欲望論－　10/28
環境破壊を超えて－ヴィジョン・希望・共感－　11/11
４．現代の生命論とキリスト教思想
現代の生命論と神学－問題状況－　11/18
創造論の視点から－人間の創造性とは－　12/2
自己決定原則とキリスト教　12/9
展望－自然神学の可能性－　12/16